



繪本孝感傳

一

^ 13  
3581  
1



門 13  
號 3581  
地 1

繪本孝感傳序



勸善懲惡者。刻蒙云。要法也。市井鄉里。學不必講。教不必明。雖有嚴父慈母。而靡有從事於此。以正其始者。若近方。裨史之作。昧焉。

繪本孝傳卷一

早稻田 大学 図書館  
昭和 35. 1 22  
藏 書

並舉禍福之明。難以繡像。以代弄球翦花之戲。使兒女自起好惡之心。暗念所取舍。可謂之足以補其弊者矣。然至如優曇月水。諸篇。設事新奇。造語不俗。自

非通書後才。穢字。閨者。其文意未易解也。如此編。作意平穩。文詞鄙俚。雖未足以迎後考之娛。而沉供童蒙之玩覽。則為多矣。乃夫推歐公所論。所謂良醫者。

恐不在於彼。而在於此乎。  
 文化乙世。首夏芝蘭。散人  
 題

意年忽也。所猶野野。野野  
 又野野。野野。野野。野野  
 非野野。野野。野野。野野



修仙石上散人像

娶婦環像



孝子  
春城  
小次郎  
像



像門衛右有田菽



繪本孝感傳卷一

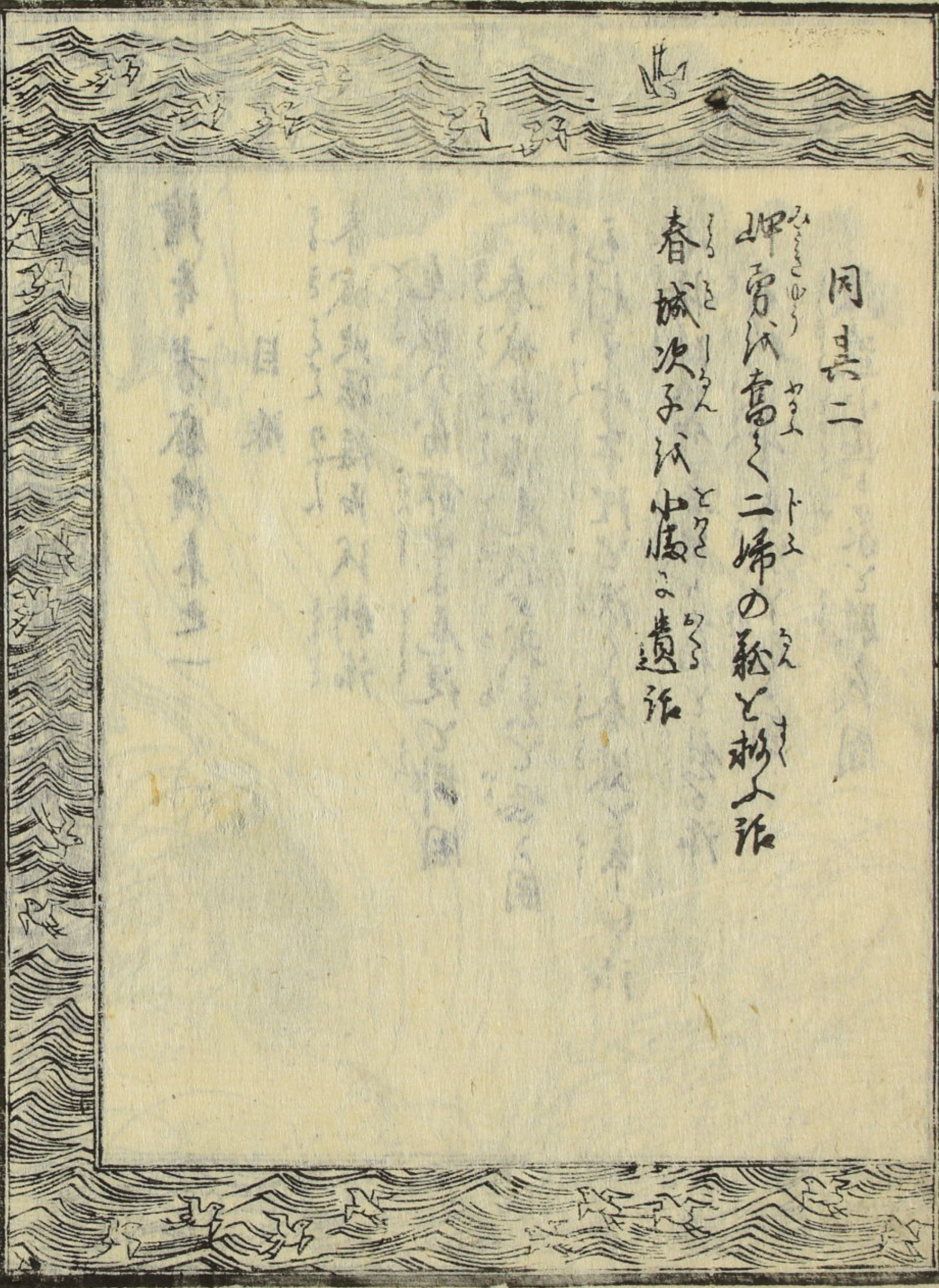
繪本孝感傳卷之一

目錄

春城典眼梅片以斬活  
 尾取八音鐘中尾從と擲圖  
 春城典眼尾取が我意と怒る圖  
 毛利と斗本理と洗く春味と云々活  
 小幡孫公命春城が病と對する活  
 毛利と斗本理と助る圖  
 強盜小波が家と騒ぐ圖

同其二

押曾以高くと二婦の糸と柳の泣  
春城次子以中宿の遺泣



繪本孝感傳卷之壹

春城曲裾倭臣代斬話

抑之弘建武よりして天下の如く分て干戈時として止事なく  
万民塗炭の中も端も是利武將の莫武よりして四海後以寧  
の王化も帰し神岳を齋と國を帝都も遷り属臣の徳後と古  
不願其端して其封疆をより教も失改めく野も清賢より功  
業を五伯に争ひ盛徳は殷周も比ぶるも志をりして世に四民後と  
教て是も亦代唱りぬ斯も有毛下野守定郷といふも徳貞安秋と  
能く教十方の家徳に於て一車万民一の存徳結して是利將軍  
我満公の清是も他も起り其も必昭徳應永の間及あらそ新  
進の士危於八も弟よりふもその代電下りて是年を起りて作ぬの

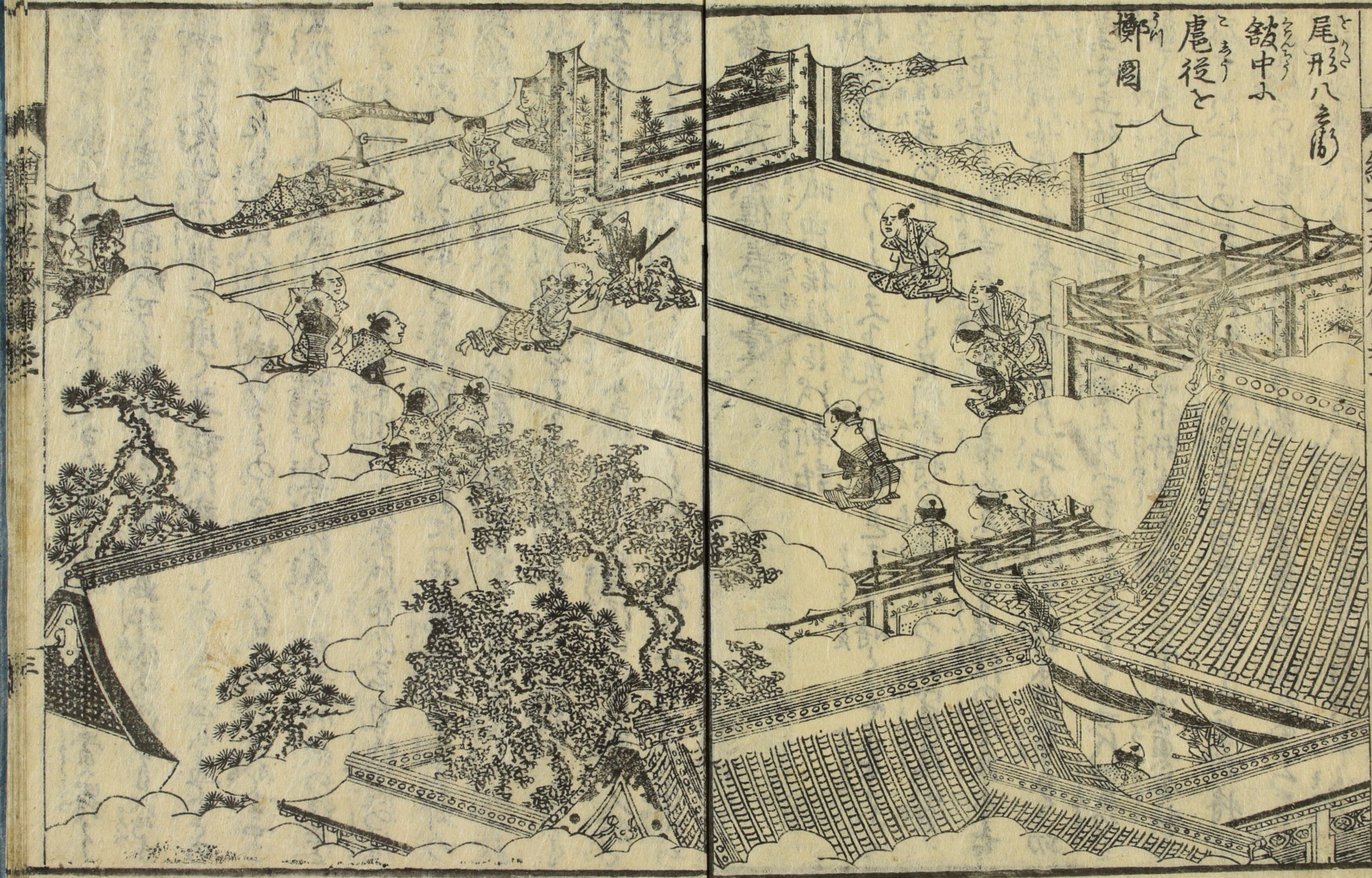
繪本孝感傳卷之壹

尾形八重

中

後

擲





恩縁代賜の内半をきつても更なり國政の成る諸士の貴賤を  
 みるまじく密に高嶽下なる尾取え来奸曲邪後の後をいさむ  
 其意に後ひ且後辨を用て其種代或一とのまじりては遠よもの  
 其功されも貴代種一憾あるもの之罷されも聽罪をかかすや  
 且種をせし程小威福の権柄自ら其まに為く古老四象の流ま  
 之にも利縁代金銀とのち渠が下風をえん半代希ひ念氣慷慨の條  
 幸も萬は切くその年の意代歌一まかて一時扈後女の士之郷乃  
 おふれく此のさ失あすくは尾取側まきく入みせり加之種ま  
 此の強弱とひくま向はまきくふ學徒士を念骨を傲りてくとも  
 老なる目六情うをまひまふる事一は同隊の信士數十人如く  
 團り進くに強敵をくははりてくとも縁代世めく軍臨の

及代義り其隊長の指揮は受とのる系は尾取君の優位  
 ありて其任ものたまふは下して辱しり代よふ半其  
 故に代義り海りあむ法とさかきん慈み於ては獨り  
 が武士のまじりてのさくば國政改道は煩雜及かんま下り代よふ  
 且力に奴代中後肉を盛く祐指代助だしと南儀と決し宿念  
 の新に連署の一紙み出し隊長春城曲膳を居身にあく執達の中  
 代よふは春城曲膳を家流する代賜て隊長の職し任し殊よふ人  
 剛直ゆして権貴に阿らば電辱あふ除めども其たみあふれ故く  
 其志操は易なる丈夫まかり故も其隊の信士を氣か自ら休の流ま  
 返尾取が権勢代も勇く長に望み殺して承く團の祐代助と傳る  
 あり此時春城信士よりおれ奴の連署は熱視せりて定ふくあひ

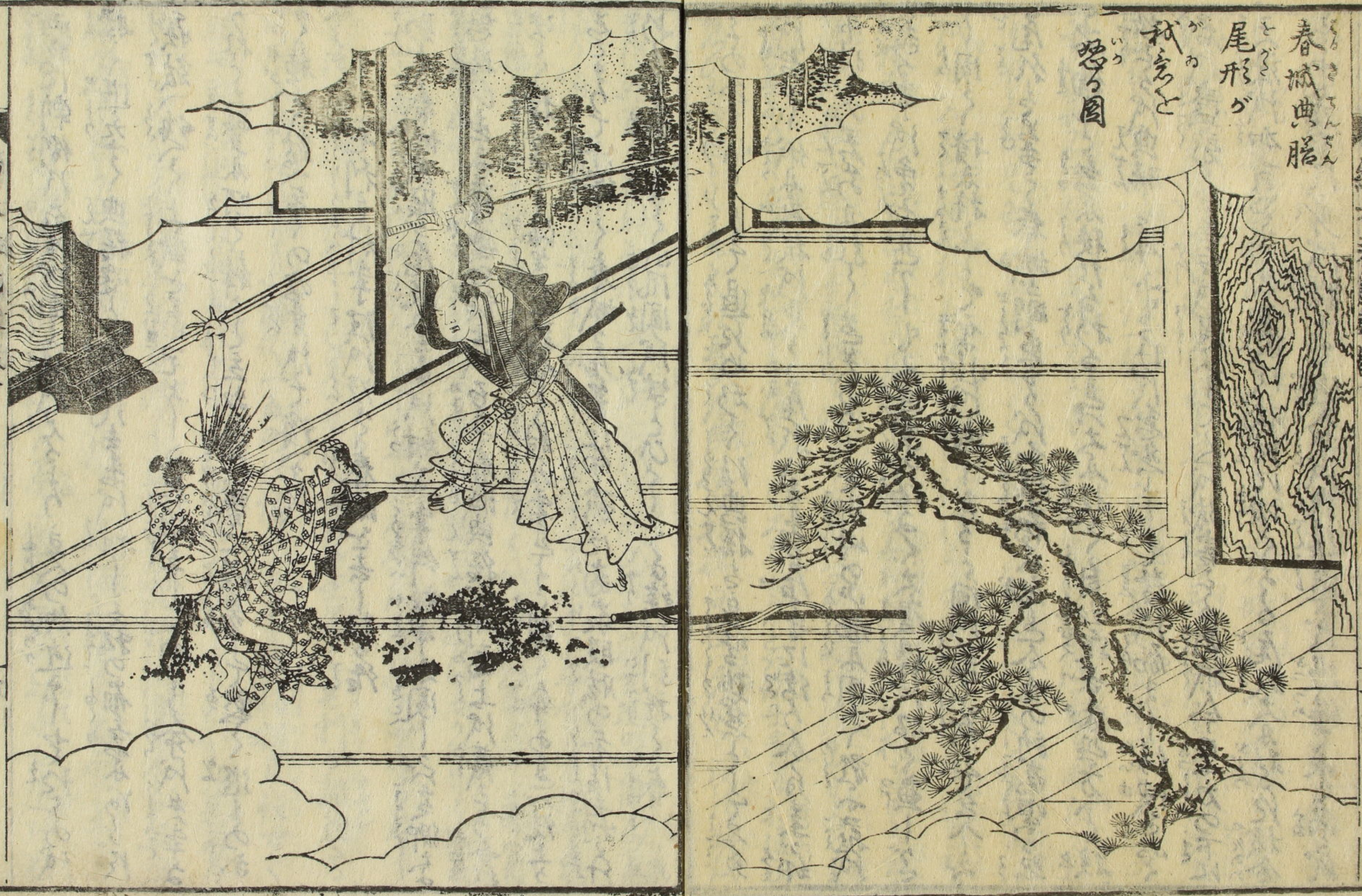


春城典膳

尾形とがらガ

我がわ多た

怒いっるら図



伊豆の州城守

兩腕に斬倒りぬる後の面々此所より主人の仇迎ふべきに  
擡ぐ進みゆく典猪喘く白眼八重代付し之私の宿をなほ  
疾鼓へ海へ上截とぞ思ふより一たび換ふてあつる命氏失事な  
くれく大勢多し可く静くと云ふ其勢に難易して救ぐ進みあ  
く種々勉むるの次第はぞ海へぞ

毛利重計幸経氏経と春城と去りむる話

勤く春城典膳が尾籠八重代付する事件致す所因一六之御よ  
怒移の志は獲衛の清士氏原は春城典膳が所為上は蔑とるされ  
決り擇ぐごとし海をぬれ向く村を去りて烈く命あはせは流上り  
とさまりて遠く春城が居着に向ふ所に南家股肱の老臣毛利重計  
おしも家名をくけ風聞代はしひくくも徳川引擡ぐ春城

手に能あり代射取んとし入緒士氏押用ひて急駕去園の志申小立  
隔り備す小射く去り君の命を去来と道もな合のみ細あはば  
典膳を去来と射が後と頼りたりと帰くけ次第代去せし道は月  
然る處にさるべき計が身も易く中祥吉一連惑とくけまじり  
上も進く典膳代射んとさるべきは飛み及び其教子やさるる  
や海代擡ぐ石をいぶすも骨仕の結生等も毛利が執事なる  
威風凛々後代付がとぞ救く一玄の理備も及ぶ指揮も何せと  
結中へ引還しぬるは終く重計典膳と拒くゆりも其某某  
ありし之を去るの志を去りて園の為小貴那代退えんとさる  
已み入し然るは小単的にも下りて福と除く忠告を去る  
て及ぶる知を感擡とるふ境り今とぞ小君の射もを退けぬ

此漢も早く國代去く跡を匿う終よ後仕の事々時を代成て来  
 ぬも斗か度一と云も敢てり典据忽ら面を代變ドこ毛利度  
 中綱とも是代我屋於代射んと思ふ初より命をくとも是事より其  
 とも自盡を遂ぐるふとのと君の教科代成るのかり半已此れ其れ  
 別みるも思ふと云にのれ代成るも其れ見當ありて万死の代成中  
 宵めめん半代成て中短刀と概く扱み突立んとせしるも其れ其れ  
 代成て我業必分代成り國の爲身代成る忠我の王よりと云  
 し何ぞ國らん備ふ身を顧て名代成む刺客の後せんとも嗚呼  
 我人何程のめまくわとも名代成費せし半よと云控く社代成  
 んとせしる典据異んで皆するなり飛代成して身代成匿と社代成  
 言代成あるが元及代成健して其れ怒を傳ふと云く身代成敢る

好と排せり半予思味にて考く其言代成は其を辨るも代  
 承りて後快く相果はるしや其言果にる句ひしる毛利を代成  
 らもく其れ降れ分の節操の如れと世の人よおく皆我れ稱せり  
 後ととも執るもよ如此もていれ其例の懸代成除くの忠又半身代成  
 で言代成避ざるの我れと兼く二の是名代成り海科代成揚用の忠後と  
 其言代成二の是名代成以て其れ忠と其れ忠と其れ忠と其れ忠と  
 新舊倫身代成願るは其れ高れありは若も其れ後ひし國代成  
 満まるも後仕の代成は其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
 改忠代成其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
 とつたし其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ  
 悦平し其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ其れ

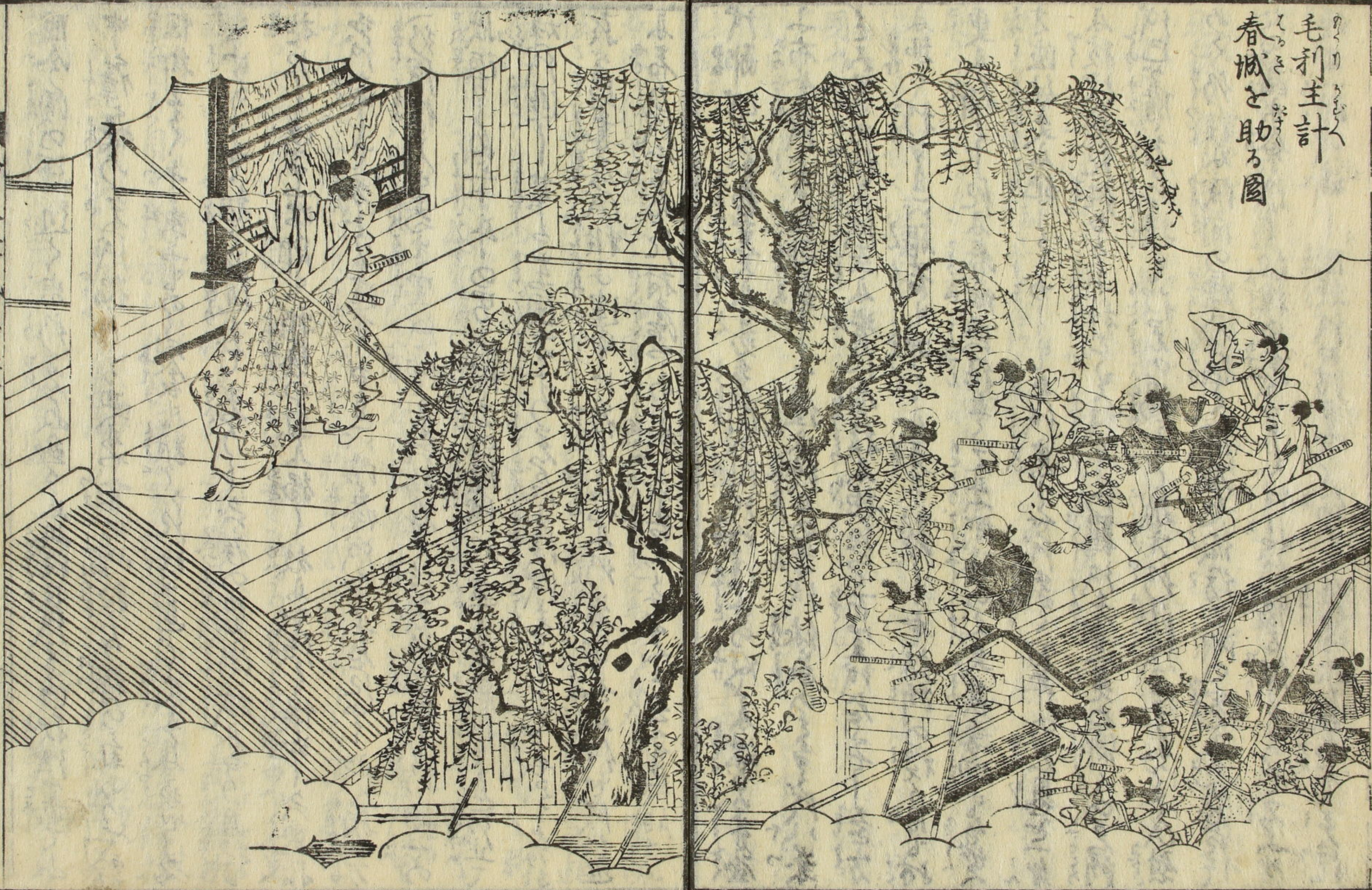
みわしとんべ永く忠の侍代遣さん此上を伴ふ侍も毎に討つ侍  
向らまはるる侍速く退ひなす侍遠く没後とす侍主代の重音  
紀録代後小納り二人の雅子代其身に及ぶ毒の背に控負毛利計  
小後の幸代死く五千裁の小門より迎せ出侍代老てまま

小侍孫次郎春城が窮を脱す話

斯く春城曲後多老後毛利計が練兵迄く故に代立退下侍  
國守津又さるる親戚の許小僧く寓居せしむ幸國通路の役  
返さるる長く還るる代地みあはれと其妻岬と色濃く美枝の  
國小侍さるる岳家及侍老し南と處知とす侍種く此代さ上  
野國を擡ぐる侍の流城下代遊分の訳より名あり侍本曾の  
山治さるる侍さるる代と及寄活を憂せ固く侍本家梁の

代鄙びさるる親美小易香間の風代坊侍子の故に小侍さるる芽屋  
小布衣代上るる代具として僅小終日の芳代体系のさるる代八茶  
とみ茶の雅子代互小背に肩後小抱はるる百里代をさるる茶  
小知く折さるる代眼若も弁く小さるる代一を飯所の視る目も侍  
更小補く見小春城曲後多老後毛利計の父其妻岬も其雙  
才法佐丈小配くさるる代一もさるる代一も百年の老恩とす侍  
小枝代を死に任さるる小計ども小牛の羈代老見ぬ御くの名所  
代已が隨々さるる侍も代君の場とす侍裁亦侍侍代さるる代一も  
めく侍代小清間の煙乃猛く懼れ代飯坊の湖の定小妻代死に  
たの島小命代くむ枝の危くも侍性侍代暢る便さるる侍  
侍小一併代編く國放代はさるる侍何く侍侍濃治も越さるる侍

毛利主計  
春城を助る圖

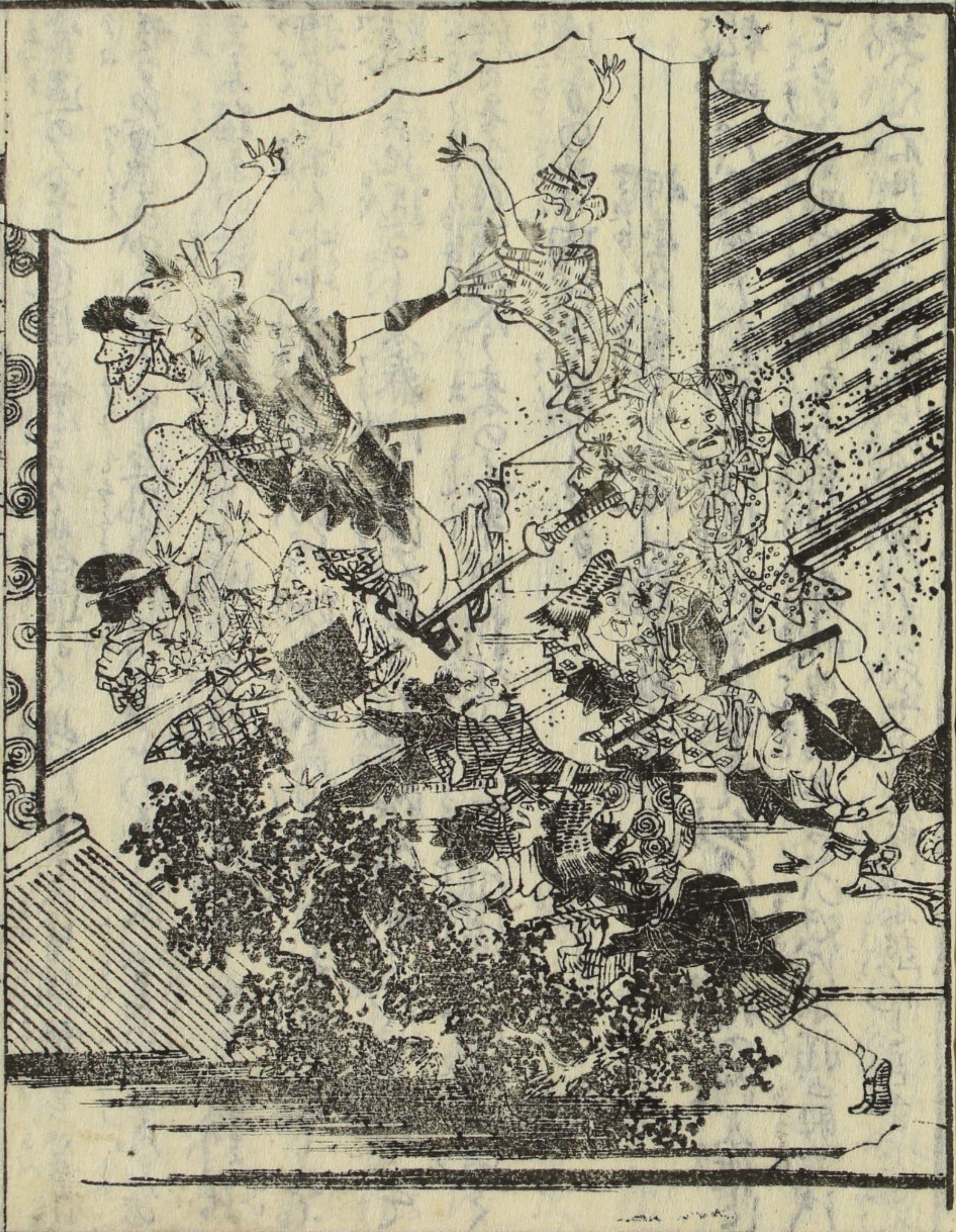
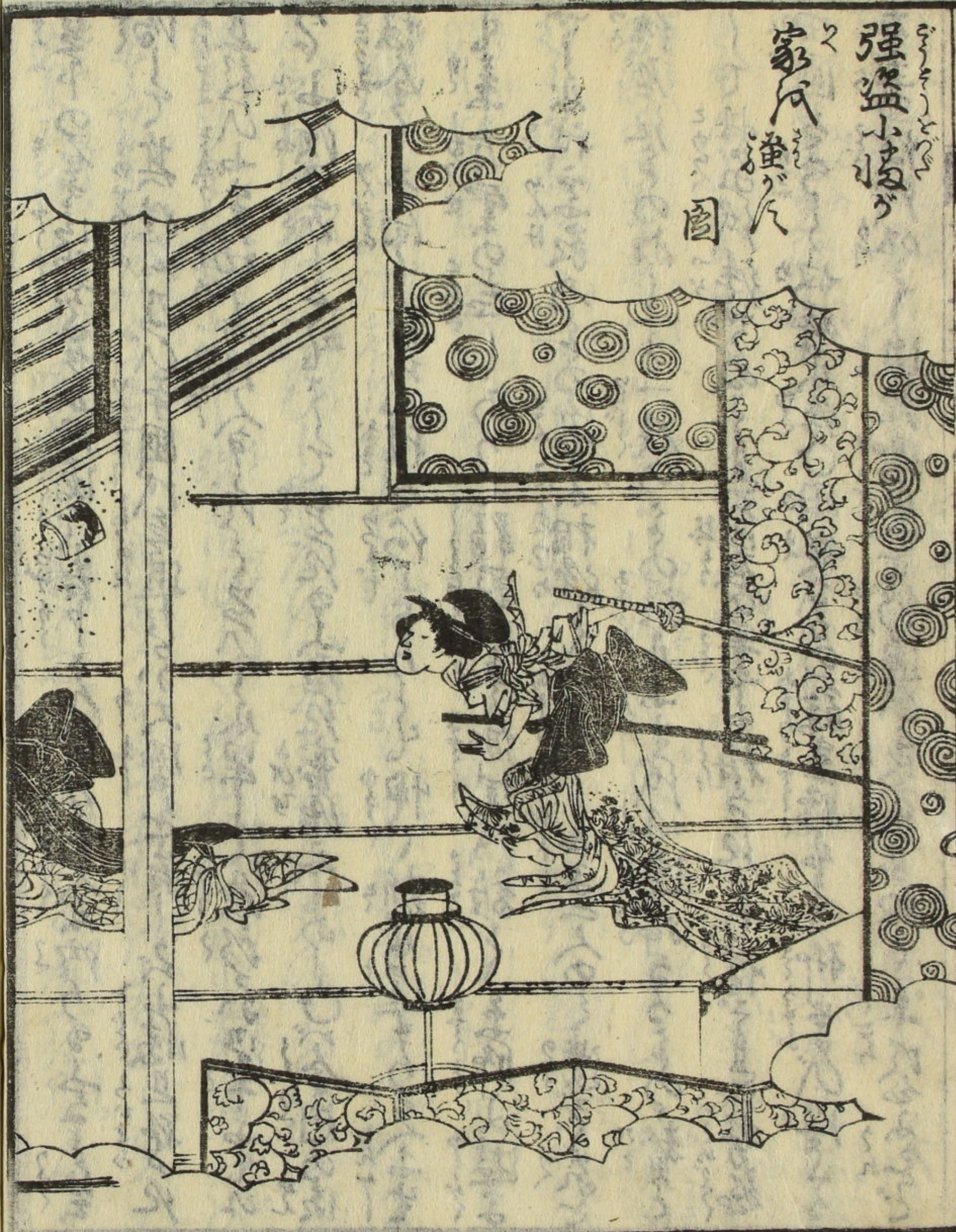






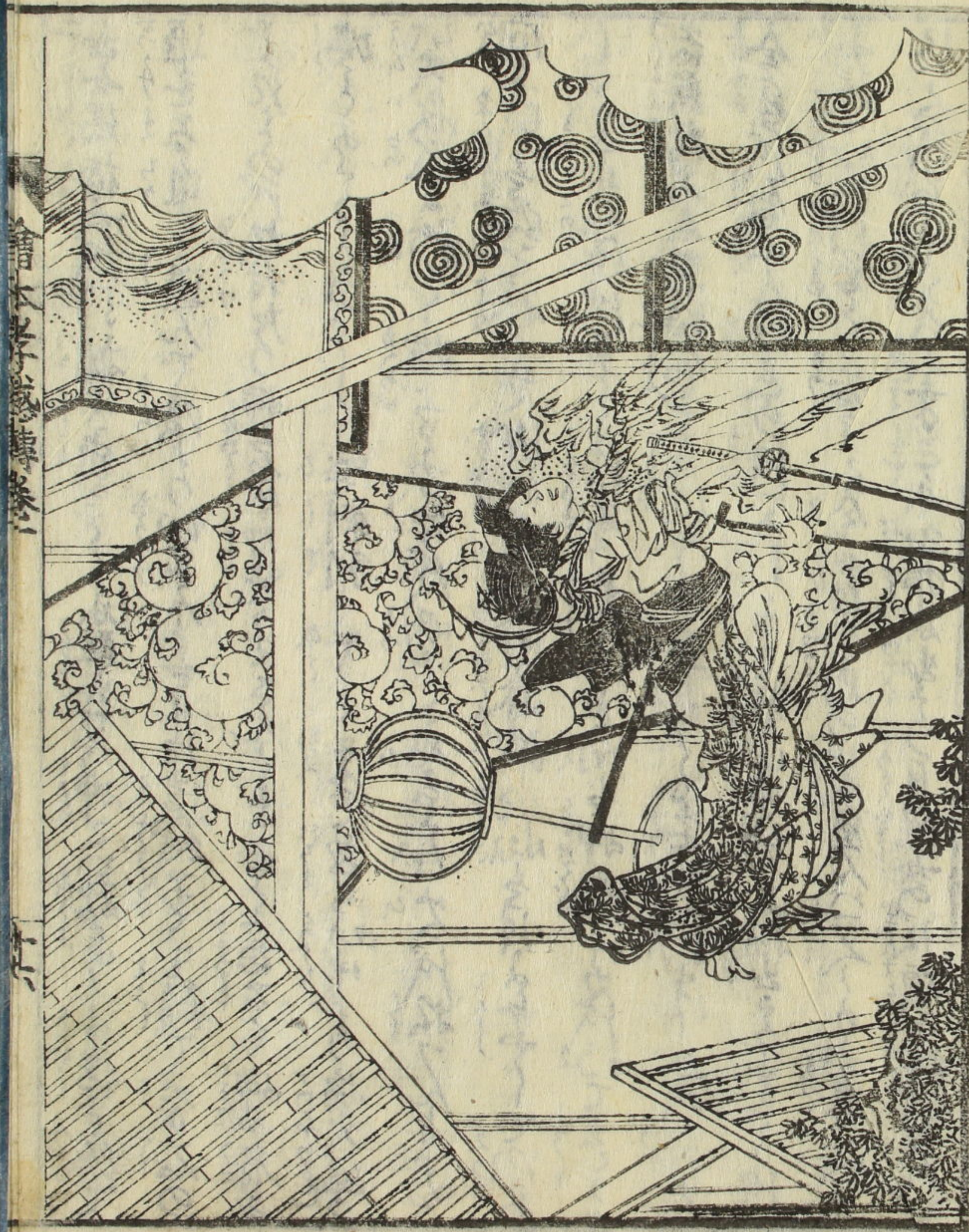


強盗小波カウラウシが  
家ウチへ  
強カウぐ  
目メ









源氏物語

十一



其二

源氏物語

十二





